

〔研究余録〕

「津軽一統志」の流布と利用について

葛谷 大輔

はじめに

享保一六年（一七三二）に完成し、弘前藩五代藩主津軽信寿に献上された「津軽一統志」（以下、「一統志」と略記）は、大名家としての津軽家の血筋の正統化に加え、寛文九年（一六六九）の蝦夷蜂起の際に藩体制が最も機能した姿を記録にとどめるために編纂されたものであるとされる（長谷川成一『北奥羽の大名と民衆』清文堂出版 二〇〇八年）。

この見解は、津軽家の自己認識を確立させるという目的として「一統志」が編纂されたということを示すものであるが、寛政期以降の蝦夷地警備においては、藩士間にも同様の意識がみられるようになり、津軽家の自己認識の藩意識への発展が窺われる。

本稿では、右にみえる自己認識の藩意識化がいかにして展開されていたのかを明らかにするために、「一統志」の藩内における機能について考察を行っていく。具体的には、これまで注目されてこなかった「一統志」の流布の実態を確認しながら、それが藩の意図したところなのかどうか、「一統志」のやり取りはどのように行われたのかという点について考察する。その上で、「一統志」が利用されている事例を取り

あげ、「一統志」がどのように機能していたのかという点について考察を行う。

一 「一統志」の流布について

現在、筆者が目録などにより確認した写本（抜書も含む）は、全部で五五書ある（紙幅の関係上、すべての所蔵先を表記できないが、写本所蔵数の多い順に、弘前市立弘前図書館、青森県立図書館、国文学研究資料館蔵津軽家文書などに所蔵されている）。もちろん、明治以降の写本もあり、また全ての写本を網羅したわけではないので、右の数値はさらに精査していく必要があるが、ここからわかるのは、弘前藩の内外を問わず、「一統志」が多くの人々に書写されたということである。こうした事例は、秋田藩の官撰史書である『国典類抄』などをみても特異なものである。

しかも、右の流布は、弘前藩側も意図したものであるように思われる。それを窺わせるものが、「二之丸御宝蔵御書物并御道具目録」（国文学研究資料館蔵三井文庫旧蔵資料〈袋綴本〉 本稿では福田千鶴（代表）『大名家文書の構造と機能に関する基盤的研究―津軽家文書の分析を中心に―』科学研究費補助金研究成果報告書 二〇〇三年所収の翻刻文を使用した）である。この史料によると、弘前城二之丸宝蔵には、歴代藩主宛の將軍領知判物や藩主自筆の書状・書付類、絵図などが収蔵されていたことがわかるが、その中には「一統志」の項目がない。冒頭に述べたように、「一統志」が津軽家の領内支配の正統化を示すものであれば、

当然それが宝蔵に収蔵されていてもいいはずである。しかし実際に収蔵されていないところを見ると、藩側にも「一統志」を広く認識させようとした意図があったことを窺わせる。編纂段階からこのような意図があったかは不明であるが、右の動向をみれば、「一統志」の流布は、まさに藩側の意図と一致していたのである。

では、「一統志」の流布は、どのようになされたのだろうか。「津輕古事伝記」（弘前市立弘前図書館蔵津輕古圖書保存会文庫）は、今通暦が、寛政三年（一七九一）に「一統志」「東日流記」「愚耳旧聴記」などの史料を編年に集録したものであるが、この序文には、「予初宝暦^{六年}丙子年、桜庭藤正盈半兵衛尉命書寄津輕一統志^{「戸八之志」}（下略）」とあり、藩士間の貸し借りによつて書写がなされていたことが読み取れる。今通暦や一戸八之丞らについては不明であるが、『弘前図書館蔵郷土史文献解題』（弘前市立弘前図書館 一九七〇年）三六頁によると、今通暦は、寛政八年（一七九六）の稽古館開校の際に学校目付になり、同一〇年（一七九八）には目付を勤めたという。少なくとも、藩士間のやり取りによつて、写本が貸し借りされ、それをもとに書写されるという形式であったようである。

二 「一統志」の利用について

「一統志」は、完成後、流布されたと同時に、様々な形で利用もされた。その事例の一つは、すでに真島芳恵氏によつて明らかにされている。すなわち、文化三年（一八〇六）の、初代藩主津輕為信二〇〇回忌法要

に際して、為信に仕えた家臣の子孫たちが提出した由緒書を集めた「由緒書拔」（国文学研究資料館蔵津輕家文書）の中に、「一統志」に関連記事があるかどうか項目に入っていたというものである（『『由緒書拔』はなぜ作られたのか―弘前藩の修史事業と関連して―』『青森県史研究』第6号 二〇〇二年）。ここで注目されるのは、寛政五年（一七九三）二月に完成した官撰史書「津輕編覽日記」（弘前市立弘前図書館蔵八木橋文庫）ではなく、「一統志」が使用されていたということである。これは、享保一二年（一七二七）一〇月二四日付の触書（『新編弘前市史』資料編2近世編1 弘前市 一九九六年 七八一号）における、提出を求めた史料の項目からも明らかのように、為信の事績を詳細に記録することが「一統志」の主要な編纂目的の一つであったことに起因すると思われる。つまり、「一統志」以後の官撰史書や準官撰史書である「津輕編覽日記」や「封内事実秘苑」（本稿では、弘前市立弘前図書館蔵一般郷土資料本を使用した）が編纂された後であっても、「一統志」は利用され続けていたのであり、これら三書は、同じ（準）官撰史書でも、その用途や編纂目的が異なっていたことを窺わせる。

この他の事例としては、右に述べた「津輕編覽日記」や「封内事実秘苑」など、近世後期以降に編纂された史書や家記の中で引用されるというものである。これは一で述べた「一統志」の流布に近いものではあるが、「一統志」としてそのまま書写するのではなく、他の史料と校合した上で編纂していることから、利用と判断した。

この引用に関しては、史書や家記の記述における、「一統志」の反映度が高いことが窺われる。例えば、為信死後、為信の次男信枚と長男信

建の子大熊とが跡目をめぐって争った「大熊騒動」の際、信枚の相続と津軽仕置を決定した江戸幕府年寄衆連署奉書や、寛文蝦夷蜂起に関する記事などは、「一統志」でしか知りえない内容である。こうした記事が引用されるということは、編者の興味もさることながら、藩の歴史を構成する重要な要素であつたといえよう。

特に注目すべきは、寛文蝦夷蜂起に関する記事である。「津軽編覧日記」においては、「一統志」の内容と全く同じではないが、「一統志」からの引用が多くみられ、記述量の多さなどから、同蜂起の重要性が窺われる。同様のことは、葛西彦六が文化一三年（一八一六）に編集した「葛西秘録」（弘前市立弘前図書館蔵岩見文庫）にもみえる。ここでの同蜂起の記事には、「一統志」巻一〇上・中・下がすべて引用されており、寛政く文化期においても、同蜂起における藩の姿を残そうとする意識が藩士にはあつたのである。

ところが、「封内事実秘苑」においては、「一統志」の反映はある程度認められるものの、同蜂起に関する記事は大きく削減され、簡単な編年体の記述に終始している。同書は、文政二年（一八一九）に稿が成り、同八・九年（一八二五・二六）頃まで追補した史料であるが、文政期に入つて突然、同蜂起に関心がなくなつたとは考えにくい。むしろ、それ以上に記述すべきものがあつたとみるべきではないだろうか。ここで想起されるのが、文化二年（一八〇五）五月の七万石の高直りと、同五年（一八〇八）の一〇万石への高直りである。「封内事実秘苑」にもこの記事が収録されており、同蜂起に拠らなくても、実際に一〇万石格になつた姿を記すことで、藩の存在意義を示すことができるという判断に

よるものと思われる。

このようにみると、藩士の家記や記録、由緒などに関わっていく（反映されていく）ことが、自己認識の藩意識化における「一統志」の機能であつたといえよう。

おわりに

本稿では、津軽家の自己認識の藩意識化への展開について、「一統志」の流布・利用をもとに考察を行った。最後に、まとめと若干の展望を述べて擱筆したい。

「一統志」は、編纂段階において、津軽家の自己認識を確立させる目的で編纂されたが、完成後は、藩士間における写本の貸し借りや書写による流布がなされたり、由緒書や編纂物に引用されたりするなど、常に「一統志」が継承される体制が存在した。この理由として、「一統志」が、藩の存在意義を示すために必要不可欠であつたという点があげられるが、それに加え、近世後期の編纂物に多くみられるように、自家の歴史を津軽家の歴史に結び付けようとする点も考えられる。つまり、津軽家との関係の深さを強調することによって、津軽家の自己認識の要素が藩士の自己認識にも含有され、それが総体としての藩意識化に結び付いていったとみることができよう。

ただし、なぜ藩意識が進められなければならないのか、という点については、今後の課題としたい。

（つたや・だいすけ 弘前大学大学院人文社会科学研究所）